被災地派遣レポート＜第２０回＞

都立多摩総合医療センター医事課　藤原　章雄　さん

私は、震災発生後１００日が経過し、慰霊祭が終了した直後の６月２１日、宮城県第１８陣として、石巻市に入りました。

直近の被災状況（６月１７日午前８時現在）は、人口１６万２８２２人に対し、死者３１０１人、行方不明者２７７０人、避難者５８７３人という状況でした。

勤務する石巻市役所には１７人が派遣され、１６人が税務課で罹災証明書の内容を不服とした再調査の申請とそれに伴う現地調査、１人が介護保険課で介護認定業務を担当しました。派遣当初に比べると支援内容も変わり、初期段階から次の段階への移行期に差し掛かっている、そんな状況でした。

私の主任務は窓口応対。罹災証明書は災害義援金の配分や生活再建支援制度の利用などその額を左右するため、再調査の申請に訪れる方々は少しでも被災判定を上げようとする、お金欲しさの醜い訴えに映りました。

また、市役所の周辺は思いのほか店舗も開いており、テレビや新聞で報道されている状況が少々オーバーなのではないかとの印象を抱くほどでした。

石巻市に入って２日目のこと、その印象は一変しました。東北地方の梅雨入りが宣言されたばかりだというのに、太陽が燦々と降り注ぐ暑い日でした。宿舎から市役所へ向かう途中、市内の高台にある日和山から港を見たときのことです。その瞬間、言葉を失いました。津波による猛威、人も家も車もすべて押し流された無残な港町の姿がそこに広がっていました。お婆さんがベンチに腰掛け、港に向かって手を合わせていましたが、自分もそこで手を合わせずにはいられませんでした。多くの尊いいのちが失われたのですから。実際、車を走らせると、汚物のような臭いが鼻を突き、バラバラになった工場や事務所、住宅がありました。肌で被災地石巻に触れた瞬間でした。

その日から市役所の窓口に立つ私の心境も変わりました。必死に生活を立て直そうとするその声に耳を傾け、何ができるわけではないけれど、精一杯その気持ちに応えたいと思うようになりました。窓口を訪れる方はいろいろで、老若男女、怒っていらっしゃる方が大半でしたが、派遣期間中に何度かやってきた水産会社の社長さんや整形外科を経営する奥様などは忘れることができません。みなさん最後は笑って「頑張らねばなぁ」「頑張らないと」と言って帰って行かれました。「頑張ってください」、私はそう言って後ろ姿を見送るしかなかったのですが、涙が出そうになることもしばしばでした。再建は決して生易しいものではないはずで、想像に難くはありません。一歩一歩、この震災から立ち上がろうとしている力と勇気に驚くばかりでした。

復旧途上の石巻ですが、日本全国から応援が届いています。石巻市役所には北は北海道から南は九州まで多くの自治体が支援に入り、税務課のある庁舎３階でも長崎県や兵庫県姫路市、山形県鶴岡市など自治体の名前の入った腕章やビブスをつけた職員が活発に動き

回っていました。「がんばろう日本」「がんばろう石巻」、同じ日本人として互いに助け合うことの大切さ、それができる日本人の素晴らしさを強く感じました。

今回、私は自ら手を挙げて被災地支援にやってきました。都民の安全・安心は私たちの使命であり、戦後最大の国難ともいうべき、この東日本大震災の支援に参加できたことは、とても大きな経験となりました。仕事で多忙を極める中、職場の方々、送り出してくれた方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

＜日和山から見た石巻私立病院方向の景色＞

＜宮城県第１８陣集合写真＞